

令和 5 年 6 月 6 日現在

機関番号：17102  
研究種目：基盤研究(C)（一般）  
研究期間：2017～2022  
課題番号：17K00721  
研究課題名（和文）ユニバーサルミュージアムの実践的研究

研究課題名（英文）Practical Study on Universal Museum

**研究代表者**

平井 康之（Hirai, Yasuyuki）

九州大学・芸術工学研究院・教授

研究者番号：10336084

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,500,000円

研究成果の概要（和文）：ユニバーサルミュージアムは、来館だけではなく運営も含め、多様なステークホルダーが包摂されるミュージアムである。多様な市民と博物館が、お互いの人間性を尊重するインクルーシブな視点に立ち、単に障がいを取り除くという解決策ではなく、お互いの関係を深めるデザインを社会実装することであることが示唆された。

多様な来館者と博物館の双方向性については、当事者側の多様なリテラシーに寄り添う解決策が必要であることが示唆された。その視点から国立民族学博物館では、当事者とともに触地図デザインを開発し社会実装を行なった。運用プログラムについては福岡市科学館でユニバーサルミュージアムの職員研修と接客マニュアルを作成した。

**研究成果の学術的意義や社会的意義**

ユニバーサルミュージアムは、ユニバーサルデザインの展示デザインへの応用と考えられがちである。しかし本研究ではソーシャルインクルージョンとして館全体が社会課題として取り組むのがユニバーサルミュージアムであり、多様な来館者の環境面の物理的アクセスから、情報面を含む知覚鑑賞までトータルな来館者サービスの視点で策定されなければならない課題であると考えに至った。本研究はその考えを、博物館における実践的な研究として行ったことに社会的意義がある。

研究成果の概要（英文）：A universal museum is a museum that encompasses not only visitors at exhibitions but also various stakeholders throughout management process. It was suggested that diverse citizens and museums should take an inclusive perspective that respects each other's humanity, and that the social implementation of designs that deepen mutual relationships is not a solution that simply removes disabilities. It was suggested that the interactivity between various visitors and the museum requires a solution that accommodates the diverse literacies of the parties concerned. From that point of view, the National Museum of Ethnology developed a tactile map design together with the diversity of people and implemented it in the museum. Regarding the operation program, the Fukuoka City Science Museum developed staff training and a customer service manual of the Universal Museum.

研究分野：インクルーシブデザイン

キーワード：ユニバーサル ミュージアム インクルーシブ ユーザー参加 障がい者 人間中心デザイン

#### 1. 研究開始当初の背景

2017年の研究開始当初は、2016年に施行された障害者差別解消法により、障がいの考え方が、身体的な障がいから社会的な障がいへ変化した時期であり、合理的配慮が求められ始めた。ユニバーサルミュージアムは、そのような社会変化に呼応する博物館の社会的意義として考えられる。

#### 2. 研究の目的

本研究では、ユニバーサルミュージアムを年齢、性別、国籍、障がいの有無等をこえて、多様な来館者の包摂が実現された博物館と定義する。

その視点から、国内外の複数の博物館を横断的に調査し、ユニバーサルミュージアムの課題とその解決策を明らかにすることを目的とする。

#### 3. 研究の方法

- 1) (知覚鑑賞) これまでの視覚中心の展示手法がもつ問題点を明確にし、視覚以外の知覚鑑賞を可能とする展示手法を構築する。
- 2) (双方向性) 同時に多様な来館者と博物館(学芸員・研究者)双方を対象としたヒアリングならびに展示鑑賞の実践プログラムを実施しながら、ニーズの間に存在するギャップや親和性を分析する。
- 3) (社会性) 評価指標をもとに博物館が自己点検や提案を実施していくことができる運用プログラムの構築を目指す。

#### 4. 研究成果

ユニバーサルミュージアムは、来館だけではなく運営を含めて、多様なステークホルダーが包摂され、参画できるミュージアムである。お互いの対等な人間性を尊重するインクルーシブな視点に立ち、単に障がいを取り除くという解決策ではなく、お互いの関係を深めるデザインを社会実装することであることが示唆された。

1) の視覚以外の知覚鑑賞を可能とする展示手法の構築については、鑑賞にとどまらない幅の広い考察となった。例えば海外調査で取り上げたフィンランドのユレーカ科学博物館では、ユニバーサルミュージアムという概念はないが、館の社会的な取り組みとして行っている。例えば、来館の障壁として、関心の欠如、モチベーションなどの個人的要因だけではなく、コスト、人種差別、性差別などの社会的要因、地理的な距離などの構造的要因として捉えていることがわかった。その結果、無料の日のように経済的なアクセシビリティへの取り組みや、マイノリティを対象として地域社会へのアウトリーチなどを進めている。また展示も、社会的な取り組みの延長として、展示キャプションの多言語化を行っている。さらに展示も多様な来館者が「自分ごと」として認識できるストーリーのある展示テーマを扱っていることが確認できた。ボストンチルドレンズミュージアムの教育担当の岩本氏を招聘した実践についてのヒアリングでも、同じく館が社会的な取り組みとして行っていることが確認できた。

以上のように、ソーシャルインクルージョンとして、館全体の社会課題として取り組んでいる状況がわかった。海外では特にユニバーサルミュージアムという言葉はない。むしろ大英博物館などが提唱する、人類普遍の共通価値をユニバーサルミュージアムとする文脈で用いられている。もともと日本でユニバーサルミュージアムを最初に提唱した神奈川県生命の星地球博物館の濱田館長が想定したユニバーサルミュージアムは、展示のユニバーサルデザインだけではなく博物館全体の取り組みがユニバーサルデザインであるという考えである。当時から館全体の

ダイバーシティ & インクルージョンを目指していたと考えられる。

他方、ユニバーサルミュージアムの UMM (ユニバーサルミュージアムマトリクス) の考えをもとに、別府市の太陽ミュージアムへのアドバイス、福岡市科学館へのユニバーサルデザインマニュアル作成、大阪の国立民族学博物館の触地図デザイン、九州国立博物館の触地図作成へのアドバイスをを行った。日本では、一部の先進的な博物館を除き、ユニバーサルミュージアムの館全体のポリシーとしての浸透はまだまでであるが、国立民族学博物館との取り組みでは、展示だけではなく、UMM の考え方をもとにウェイファインディングについて当事者とワークショップを行い、館のブランディングや館までのアクセスなど、基本展示入口の触地図デザインまで、展示に至るアクセスの社会実装を行った。太陽ミュージアムでは、これまでの太陽の家の活動展示が中心であるが、「亀川と別府のまち 共生社会を考える MAP」で、亀川の障がいのある人たちの声や生活を地図上に可視化しユニバーサルミュージアムの考え方を反映する計画を行った。その結果、障がい者への一方通行のサポートという考え方ではなく、共に生きることへの意識チェンジを図るため For から With へということの表記をしたいという声が太陽の家から寄せられた。

九州国立博物館展示課の加藤小夜子氏、茂泉千尋氏と視覚以外の知覚鑑賞の可能性について、視覚に障がいのある来館者を対象とした触知マップの作成に協力し実現した。

2) の多様な来館者と博物館 (学芸員・研究者) の双方向性については、多様な来館者の視点から鑑賞体験の課題調査について、個人来館者、NPO、各種障がい者団体の協力を得て課題を抽出し、多様な市民への調査を行うことができた。その結果から、北九州にある生き方のデザイン研究所との鑑賞サポートツールのプロトタイプを作成した。これは視覚障がいのある人と共同で進められた。当事者が理解しやすい鑑賞サポートツールとしてハンズオン用科学者人形を選び、触って理解できる表現を行った。

以上の調査から、環境面では、下肢障がいのある人を中心としたアクセシビリティ、情報面では、ウェイファインディング、ハンズオン、多言語対応が求められる。その実現には、単なる代用品ではなく、当事者側の多様なリテラシーに寄り添う解決策が必要であることが示唆された。

3) の運用プログラムの構築については、具体的な運用プログラムの実施として、2017 年に開館した福岡市科学館の協力を得た。福岡市科学館ではオープンに合わせ、自己点検や提案が行われるように職員向けの人材育成プログラムを、UMM (ユニバーサルミュージアムマトリクス) をもとに作成した。具体的には、これまでに収集された事例をもとにデザイン提案集を研修用スライドとして用いながらユニバーサルデザイン研修を実施した。さらにユニバーサルデザイン接客マニュアルを作成した。

また、最終成果報告として、2019 年 3 月に国際シンポジウムを企画したが、コロナ禍の影響で開催が大幅に遅れた。2023 年 1 月にハイブリッドで実施した。フィンランドのユレイカ科学博物館から展示デザイナーの Sampsa Piira 氏を招聘し、国内の研究メンバーとともに発表を行った。

博物館において障害者差別解消法による合理的配慮の展開によって、「多様な来館者に対する方策」の認知度は高まっている。しかし、その同法の「対話を行う」という仕組みに対し、「多様な来館者に対する方策」の実現について各館が対応できる範囲が、人的、経済的リソースなどによって限られていることも浮き彫りになった。

新規の博物館においては、今回の科研費では福岡市科学館の取り組みへの貢献を行うことができたが、その他の博物館との総合的な取り組みについては実現には至らなかった。

最大の課題は開館準備時の人的、経済的リソースの不足であり、どこの新規博物館でも起こって

いる状況である。よって新規博物館については、合理的配慮の義務化と具体的な方策の提供が必要であるとする。

ユニバーサルミュージアムは、ソーシャルインクルージョンとして館全体の社会課題として取り組むべき内容であり、展示面では知覚鑑賞にとどまらず、多様な来館者の環境面の物理的アクセスから、情報面を含む知覚鑑賞までトータルな来館者サービスの視点で策定されなければならないであろう。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 平井康之	4. 巻 7
2. 論文標題 未来をデザインするサイエンスコミュニケーション	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 日本サイエンスコミュニケーション協会誌	6. 最初と最後の頁 2,6
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 平井康之、高安礼士	4. 巻 第23号
2. 論文標題 科学博物館におけるデザイン思考に基づく学習プログラムの開発	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本ミュージアム・マネジメント学会 研究紀要	6. 最初と最後の頁 59,66
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 富本 浩一郎, 平井 康之, 日高 真吾	4. 巻 26 巻 1 号
2. 論文標題 国立民族学博物館触知案内板のデザイン開発	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 デザイン学研究作品集	6. 最初と最後の頁 100,105
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.11247/adrjssd.26.1_1_100	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 2件/うち国際学会 1件）

1. 発表者名 平井康之、高安礼士
2. 発表標題 サイエンスコミュニケーションと科学イノベーション
3. 学会等名 日本サイエンスコミュニケーション協会 JASC2018年度第3回研究・定例会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Yasuyuki Hirai
2. 発表標題 Science Communication Program at the Fukuoka City Science Museum
3. 学会等名 The 7th International Symposium of Science Museums (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 平井 康之
2. 発表標題 ユニバーサルミュージアムとサイエンスコミュニケーション
3. 学会等名 全国科学博物館協議会 (招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 平井康之
2. 発表標題 インクルーシブデザインの理論と実践について
3. 学会等名 九州大学バリアフリー研究会定例会 (招待講演)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 平井康之他共著	4. 発行年 2018年
2. 出版社 株式会社樹村房	5. 総ページ数 254
3. 書名 ミュージアム・コミュニケーションと教育活動(博物館情報学シリーズ 第5巻)	

〔産業財産権〕

〔その他〕

平井康之 研究業績  
<https://hyoka.ofc.kyushu-u.ac.jp/search/details/K002361/research.html#30740313502698932318>

富本 浩一郎、平井 康之、日高 真吾、山中由里子、デジタル触地図のデザインは下記3つの国際賞と2つの国内賞を受賞：  
 2021年度日本デザイン学会年間作品賞「国立民族学博物館触知案内板のデザイン開発」、日本デザイン学会  
 2020年度グッドデザイン賞、IAUD国際デザイン賞2020銀賞(公共空間デザイン部門)  
 「UNIVERSAL DESIGN competition 2021(IUD(ドイツ Institute for Universal Design) 主催)で「UNIVERSAL DESIGN expert 2021(専門家賞)」「UNIVERSAL DESIGN consumer 2021(消費者賞)」ダブル受賞

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計1件

国際研究集会 ユニバーサルミュージアム デザイン シンポジウム	開催年 2023年～2023年
------------------------------------	--------------------

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------